

NEWSLETTER NO. 29

フィリピン首都直下地震ワークショップ

CWS Japan が運営する Asian Disaster Reduction and Response Network (ADRRN) * のイノベーションハブが、11月27日から3日間にわたり現地パートナーとともにワークショップを開催しました。参加者は公募で選ばれたNGO、地方自治体、大学、高校など首都直下地震の防災・減災に取り組む8団体で、イノベーションハブのパートナーである Humanitarian Innovation Fund (HIF)が開発したガイドを用い、リスク診断、警報装置、液状化現象対策などそれぞれの視点から課題を分析しました。

フィリピンではウェストバレー活断層というマニラ首都圏を縦断する断層により引き起こされる地震への警戒が高まっており、M7.2の地震で3.2万人の犠牲者が出るとする研究結果もあり、市民社会による取り組みが進んでいます。本ワークショップは日頃別々に首都直下地震に取り組む団体が一堂に会し、お互いの取り組みを知ることによって課題をより深く理解することを目的に開催されました。初日には民間防衛局 (OCD) とフィリピン地震火山研究所 (PHIVOLCS) が登壇し、政府と研究機関の視点も共有され、参加者からは新たな気づきが得られたとの感想が寄せられました。

本ワークショップは全2回のシリーズとなっており、今回は2月の中旬に開催され、第1回と同じ8団体がフィールド調査の結果を持って再会し、「誰が何をすべきなのか」課題をさらに掘り下げる予定です。



各チームによる気づきの共有

***ADRRN**: 20か国56団体から構成される災害支援NGOのネットワーク。CWS Japanは準会員として加盟している。

(文: 事務局次長 打田 郁恵)

アジア太平洋NGOパートナーシップウィーク

CWS Japan が理事を務める ADRRN と International Council of Voluntary Agencies (ICVA)、国連人道問題調整事務所 (UNOCHA) などがパートナーシップを組んで企画した「アジア太平洋NGOパートナーシップウィーク」をバンコクにて実施しました。

12月の本会議は以前から毎年実施していた ADRRNの総会が進化したもので、今年は30カ国以上から約150人が出席し、アジア太平洋地域で課題となっている人道支援の在り方や、気候変動の影響を受ける中でイノベーションの重要性、2016年度の世界人道サミットで提唱されたローカライゼーションのアジア地域における更なる実施についてなど、様々なトピックにおいて議論を展開しました。この会議の特色は、いわゆる国際NGOではなく、アジアの国々に本部を持つローカルNGOが主体となっている事で、防災や人道支援に関する国際的な議論を、現地の事例とともに紐解いていけるユニークさもありました。

例えばインドネシアで今年発生したスラウェシ島地震において、国際NGOと現地NGO、現地政府との協働が大きなテーマでした。インドネシア政府は現地政府や現地NGOが主導権を握るべきだと決定したことに対し、国際NGOからは批判も出ました。しかしながら、現地主導を掲げるローカライゼーションを議論するのであれば、現地団体を一番念頭に置いた事業運営の方法を国際社会は探るべきで、積極的なビジネスモデルの変革が求められるとの強いメッセージが印象的でした。

気候変動の影響もアジアでは顕著で、洪水や台風などの気象災害も増え続けています。それらからどうやって命を、生活を守るのか。減災にローカルアクションは不可欠で、ADRRNとしてのコミットメントも文書化し、近く発表する予定です。守れる命を守れるように、CWS Japanでは引き続きアジアの仲間たちと協働しながら増え続ける災害リスクに立ち向かっていきます。

(文：事務局長 小美野 剛)



ワークショップ参加者と

ミャンマーからStory of Change

CWSが5歳未満児のための栄養改善支援を続けているミャンマー、マウビン郡の受益者から届いたストーリーです：

Ma Thandarは29歳。33歳の夫、U Thet Naingと4歳の娘、Ei Ei Phyوと3人でYae Le Gyi村で暮らしています。農業労働者の二人は、毎年、収穫時期に月15～20日程度働き、8,000ミャンマーチャット（570円相当）の日雇い収入で生計を立てています。雨期（6月～10月）の間は、夫のU Thet Naingは、自家用と現金収入のために川で漁をし、1日1,500ミャンマーチャット（107円相当）という、わずかな収入で生活しています。村の他の家族と同様に、Ma Thandarの一家も洪水の時期には、農作業の仕事がなくなり、時には、漁業収入だけでは家計を賄えない時もあります。そんな時には、Ma Thandarは中間業者から月15～20%の高利で借金をすることになります。それでも、どんなに貧しくても、彼女は、毎日、娘のEi Ei Phyoには身体に良い食事を与える努力を怠りません。

2017年の7月、CWSが行った身体測定の結果、娘のEi Ei Phyoが栄養改善プロジェクトの対象者に選

ばれました。母親のMa Thandarは娘が健康で幸せになることを願い、CWSが主催する全ての栄養・衛生講習会に出席して、新しい料理を学び、他の母親と学んだ知識を共有するなど、意欲的に活動しました。「私が一番好きなのは、料理実演講習と料理コンテストです。全ての講習会が終了した時、私は母親グループのリーダーに選ばれて、自分が他のメンバーに信頼されていることを知り、とても嬉しかった。リーダーとして、子どもの月例身体測定を運営する自信もつきました。自分が学んだことをミーティングで他の母親達と共有できるなんて、これまで考えたこともありませんでした。とても貴重な経験です。」とMa Thandarは言います。

「以前は、自分は貧しくて、子どもに十分に食べさせ、健康に育てることができないと思っていました。でも、今は、地元でも手に入る食材を使って、子どもの健康のために、色々な料理を作ることができます。支援してくれたCWSと支援者にとっても感謝しています。」

(文：プログラムマネージャー 牧 由希子)



Ma Thandarさん

今年もお読みいただきありがとうございました。
良いクリスマスと新年をお迎え下さい。

2018年も残すところ僅かとなりました。改めて、CWS Japanの活動に対する皆様のご支援に心より感謝申し上げます。

今年は西日本での記録的豪雨災害やインドネシアの地震災害など、たくさんの方が被災されました。首都直下や南海トラフ同様、フィリピンでも首都直下地震が懸念されています。気候変動の影響によって今後も気象災害が多発する事が懸念されています。災害リスクは消え続ける一方ですが、一人でも多くの方が助かるよう、防災・減災の視点を大事に2019年も活動して参ります。

今年の年の瀬が、そして2019年のスタートが、皆様にとって穏やかで実り多きものとなりますよう、CWS Japan職員一同祈念いたします。

Happy Holidays
CWS Japan